



リムスキーコルサコフ 作品35

Rimsky-Korsakov

交響組曲「シェエラザード」

Scheherazade

(指揮)

ムステイスラフ・ロストロポーヴィッヂ M.Rostropovitch

パリ管弦楽団 Orchestre de Paris

(ヴァイオリン・ソロ)ルーベン・ヨルダノフ L.Yordanoff

■製作にあたって

オーディオ・ファンの皆様、平素は第一家庭電器を御愛顧いただき、ありがとうございます。当社はおかげ様をもちまして創立20周年を迎えることができました。

またDAM恒例“カートリッジ頒布会”も今回で10回を数え、これも皆様の御支援のたまものと、あわせて厚く御礼申し上げます。

さて、このDAMオリジナル・チェック・レコードは音質重視のため片面15分以内の45回転カッティングなので、今迄はなかなか大曲を取り上げることができませんでした。

今回は、ファンの皆様の声にお応えして、リムスキーコルサコフの交響組曲“シェエラザード”を創立20周年・頒布会10回記念として、2枚組のアルバムを企画いたしました。

このアルバムを指揮している、ムステイスラフ・ロストロポーヴィッヂは指揮者として

よりは、むしろ世界最高のチェリストとして有名ですが、そのロストロポーヴィッヂが、オーケストラ指揮者デビューとして選び、たちまち大評判をよんだのがこの曲です。

この演奏には、他の指揮者では味わえないような新鮮な感覚があふれ、数あるシェエラザードの名盤の中でも第一級の折り紙つき名演となっています。

DAM45には、過去、ベルリン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団等、ドイツの重厚なサウンドを特長とする名門オーケストラが登場しましたが、今回は、豪華絢爛、目のさめるようなカラフルな音色美では世界に並ぶものがないといわれる、フランスの誇る国立のパリ管弦楽団の名人芸をお聴きいただけます。

“シェエラザード”は、オーケストラの楽器が総動員され、あたかも楽器の見本市のような大サウンド絵巻が展開されますので、とにかく聴いているだけでその情景が想い浮ぶ大

変楽しい曲です。又、オーディオ・ファンにとっても、各楽器の分離、音色の変化、ヨルダノフ演奏のソロ・ヴァイオリンのみずみずしさ、フル・オーケストラの中でクローズ・アップされるソロ楽器の美しさ、全体の音の切れ込みなど、そのオーディオ・チェック・ポイントは無尽蔵にあるといえるでしょう。

この“シェエラザード”という曲は、好都合なことに、4つの楽章がそれぞれ11分～13分程度なので、それぞれ各楽章を一面にゆったりと、ハイ・レベル・カッティングしています。皆様のお好きな面をとりだして、御自分のシステムにあわせてチェック・ポイントをみつけてください。

ところでDAM45では、音質向上を目指して毎回、新技术をとり入れてまいりましたが、今回は、パリ管弦楽団の音色の変化をあますところなく再現するために、カッティング針には、溝の切れ味が良く、周波数特性も向上

するといわれるダイヤモンド針（従来はサファイア針）を使用してみました。更に最近オーディオ・マニアの間で、ターンテーブル・シートや、シェル、リード線等、プレーヤー関係に関心が高まっている折から、まず再生音の原点であるレコード盤の改良が先決と考え、特に“厚手のレコード”といたしました。勿論、好評のマスター・プレスを今回も採用し、少しでもラッカー原盤の音に近づけようと、東芝EMI（株）の最高水準のレコード製造技術を導入していただきました。

オーディオ技術、レコード製造技術は日進月歩しておりますが、DAMでは今後も更に皆様のオーディオ・ライフにお役に立つ最高水準のソフト・ウェアを提供させていただきたいと考えていますので、よろしく御支援のほど、お願い申し上げます。

なお、レコード化にあたり、東芝EMI（株）をはじめ関係各位に多大な御協力をいただきましたことを、心から御礼申し上げます。

DAM推進委員会

■ロストロポーヴィッチについて

男と生れて一度はやってみたかった職業は?——というグラビア記事が以前、某週刊誌に連載されていた。いわゆる有名人が、小さい頃から憧れていた仕事をやっている扮装をしてカメラに収まるという、またわいな記事だったが、俳優が消防士に、プロ・ゴルファーがラーメン屋に……という具合に、意外な人が意外な仕事に憧れているもので、「小さい頃」の生活環境やコンプレックスが窺えるような面白さがあった。その中の一つに、「指揮者」というのがあり、某有名漫画家が例のエンビ服を着こみ、オーケストラ(これは本物)を前にやたら深刻な表情でタクトをかまえている。当人は《モルト・レリジオーソ(=極めて厳肅に)》といった風情だが、オーケストラの面々は、一応は楽器を手にしているものの、笑いを押し殺すのに懸命の様子だった。

漫画家某氏に限らず、指揮者に憧れる男、というのは結構いるものだろう。100人を超えるオーケストラを前に、ある時は左手(棒を持たないほう)を小刻みに震わせて恍惚にひたり、またある時は目を見開き髪ふり乱してテンポに拍車をかけて、クライマックスになだれ込む——そして、一身に享けるあの聴衆の大熱狂、賛辞の嵐! 憧れないのが不思議というものだ。

ところが、いざその夢を実現するとなれば、これはもう東大入試なんてめじやない難しさとされている。まず最低条件としてピアノが弾け、リズム感に秀で、絶対音感を持ち、各種楽器に通曉していなければならぬ。また、卓抜なる運動神経、総譜を憶える暗記力、世界の檻舞台で活躍する日にそなえての語学力も必要だ。だが、なにも増して大切なのは、《人徳》とでも言うか、一種カリスマ的な人間の魅力なのだから、もう、受験勉強できる類いの代物じゃなくなってしまう。オーケストラには、その道40年このかた一途にヴィオラを弾いてきた——なんてオッサン達がうじやうじやいる。初めて迎える若手指揮者のリハーサルで、メンバー全員しめしあわせ、全て半音下げてやってみて、気づいたら一人前、気づかなかつたが最後、もうてんで馬鹿にして相手にしない——なんていう嫁イビリみたいなことも平気でやる。そんな連中を相手に「マアこの若いの、なかなかやるじやないか。ヨッシャ。ひとつ、いい音がしてやるかい」って気にさせるのが《人徳》ってものなのだ。こういった幾多の難関、天は我を見捨てたもうたと考へてすっぱりあきらめて戴くか、自宅6畳間でレコードにあわせ、ごくごく内輪の楽しみでもって満足していただくのが、賢いやり方というものだろう。

この《指揮者願望》、じつはプロの音楽家の中にも、相当根強くあるようだ。われわれ凡人にしてみれば、オーケストラで、あるいは

ソロ・プレイヤーとして、あれだけ晴れがましい舞台に立てばもう充分やないか、とも思えるのだが、どうもそうではないようだ。音楽家として極め得るところまで極める。しかし、まだ、心から音楽への愛はやみ難くあふれ続ける。こんなんじゃない音楽をやってみたい。そこで新人指揮者誕生とあいなるのだ。

思いつくままに挙げてみよう。バレンボイム(もともとピアノ)、ブーレーズ(同作曲)、故オイストラッフ(同ヴァイオリン)、F=ディースカウ(同バリトン)、アシュケナージ(同ピアノ)、そしてロストロポーヴィッチ(同チェロ)。

これらの人達はいずれも、各々の分野で功成り名遂げた大家と呼んでいいだろう。そんな彼ら、余技に、あるいはたまさかの寛ぎに指揮棒をとったのかも知れない。しかし、彼らの演奏にきく從来の指揮者と違った新鮮な魅力がウケにウケて、現在、単に余芸にとどまらず、どちらが本職か判らない程の活躍をくりひろげているのだ。その筆頭の一人が、カザルスのあとをうけて今世紀最高のチェリストと呼ばれ、同時に指揮者としても数多くの賛辞を得ている、ムステイスラフ・ロストロポーヴィッチその人なのだ。

ロストロポーヴィッチ(1927~)がはじめてタクトをとったのは1961年のことだったとい。だが、なんといっても彼の指揮者としての評価を確立したのは、1968年、モスクワ・ボリショイ劇場でチャイコフスキイ:オペラ「エウゲニ・オネーゲン」をふったときだつた。これを皮切りに、ロストロポーヴィッチの指揮者としてのキャリアがはじまる。ソ連国内はもとよりヨーロッパをも舞台に、チェロに、指揮に、またある時はチェロ独奏をしながら同時にオーケストラを指揮するという、まさに八面六臂の活躍を続けた。が、その後、反体制作家ソルジェニツィンを弁護したかどで、ソ連政府から国外演奏活動を禁止され、1974年まで、彼はソ連国内に留まる不遇の日々を過さざるを得なかった。国内では演奏会の数や曲目まで、政府の指示に従わされたとい。1974年5月、禁がとけヴィザが交付されるやいなや彼は、自由な演奏活動を行なうべくヨーロッパに渡り、夫人ガリーナ・ヴィシネフスカヤ(ソプラノ)とともに、あたかも堰を切ったかのように精力的なコンサート活動を開始した。このレコードの録音も、まさにその時期の仕事のひとつだ。その後のロストロポーヴィッチについてはオカタイことで有名な我が國の大新聞でも報道され、御存知のかたも多いだろう。ソルジェニツィン問題等に関する国外での発言がソ連最高幹部会の逆鱗にふれ、「ソ連の威信を著しく傷つけた」かどで、1978年、市民権(=国籍)剥奪のうきめにあう。現在彼は一生ソ連に戻れぬ身となりながら、米首府ワシントンでナショナル交響楽団常任指揮者のポストを得、自由な演奏活動をエンジョイしている。

話をもとに戻そう。ロストロポーヴィッチの指揮する音楽の魅力について考えてみたい。まず、彼自身の語る言葉を、少し長くなるが引用させていただきたい。

「当節、私たちはしばしばコンピューター風の解釈を聽かされる。たとえば、あの有名な《変ロ長調ピアノ協奏曲》(第1番)は、じつにひんぱんに良くも悪くもない凡庸な水準で演奏されている。固定された決まりきったテンポで演奏されるので、曲の価値を低下させる以外のものもない。このような統一型に執着することは音楽づくりに許されるべきことではあるまい。こういう風潮は人間の生活にも總体的にひまつっている。人間はますます型にはめられていくようである。だが、私たちはねに個性の重要さを忘れてはならない。それぞれの人間はそれぞれべつの魂をもつてゐるのだから、自己の個性を表現すべきである」(東芝EMI チャイコフスキイ交響曲全集 EAC-77196 ~202 別冊解説書より引用 三浦淳史氏訳)

率直に語られたこの言葉に、ロストロポーヴィッチの、音楽に対する、極めて真摯な本質が込められている。「一般的な」解釈にこだわらず、あくまで自分自身の理解と感情に忠実に、そして誠実に、音楽に取りくもうとする姿勢。その結果としてあらわれる、根本的な性格としての大きな愛と共感があるで一本の強い火の柱のように全曲を貫き通している、彼の音楽。

たとえばこのレコード。第1面冒頭を聞いていただきたい。このような、力強く、輝きに満ちた響きで開始された「シェエラザード」が、かつてあつただろうか!? 確かに、オーケストラがフランスきっとの名門パリ管弦楽団だということもあるかも知れない。明るく柔かい管の音色は獨特のものだ。だがこの力強さは一体どう説明できるというのだ。フランスの管にありがちな輪郭ひいては構築のあいまいさは、すっかり影をひそめている。力強い構築性に裏打ちされた明るく豪放な音楽。

もうひとつ、ぜひ書いておきたいのは、弦の合奏に聞く、暖かく美しい光沢をもった音色だ。ここではロストロポーヴィッチがチェロの比類ない名匠だということが、大きく生かされているのであろう。例えば第3樂章の異国の王子と王女のロマンスを、彼は実に甘美に、心こめた優しさで歌わせる。弦に聴くこの慈愛に満ちた歌ごころこそ、特筆せねばならぬもうひとつの魅力だ。

深みに欠けると言われ、とかく大家に遠慮されがちなリムスキー=コルサコフのこの作品を彼は、何ひとつの衒いも照れもなく、深い共感をもって取り組み、その結果ここに、まるで今はじめて演奏されたかのような、みずみずしいレコードが生まれたのだった。現在までのロストロポーヴィッチのレコーディングは、いわゆる《お国もの》に殆ど限られている。これから先、彼のレパートリーが拡がり、ベートーヴェンやモーツアルトまでも、彼のこの大きな人間愛と音楽愛に満ちた演奏で聴ける日がくるのを心待ちにするのは、ばくだけではないだろう。

■曲目について簡単に

音楽など婦女子のたしなみ——との考えは戦前の日本のみならず、西洋にもあったようだ。リムスキー=コルサコフ(1844~1908)も音楽を愛しながら親の命を受けた海軍兵学校に入学。正規の音楽教育を受けなかったものの、音楽への情熱絶ちがたく、後年《ロシア五人組》の大立物とまでなった人物だ。若き日の海軍・遠洋航海の経験と、オリエントへの見果てぬ夢が、彼の作品のかずかずに色濃いロマンティズムを添えている。天賦の才

とでも言うほかない見事な管弦楽法で織りなされた豪華な音の絵巻、まさにオーディオ・ファンにうってつけの作品と言えるだろう。

この曲は、テーマを御存知「千一夜物語」にとっている。相當にがい体験でもあったのか、女はみんな不貞であるくて汚なくて…と思いつこんだシャーリアール王は、どんな女も一晩(よいことをして)すごした後は殺してしまおうと考えた。いってみれば《使いすての発想》というわけだ。時の権力者というのは、洋の東西を問わずに女性には不自由せず、酒池肉林の極楽を味わえるものらしい。…で、ある晩、順番がめぐってきたのが若く美しきシェエラザード。彼女も人の子、命は惜しい。そこで考えたのが(ここが幼稚なのだが)、楽しくも不思議なオハナシをして王様を眠らせてしまおうという計略。まさか子供じやあるまいし…って気もするが、そこが物語、1001日のあいだオハナシを続けて、めでたくシャーリアール王、くだんの《女・使いすて計画》を完全放棄してしまう、という筋書だ。

その夜ごとの寝物語の中から4つの話を選んでリムスキー=コルサコフは音楽化した。(但し、それが具体的に「千一夜物語」中のどの話にあたるかは詳かでない。)

1. 海とシンドバッドの船 SIDE 1

冒頭に出る力強い旋律はシャーリアール王、続いてのヴァイオリン・ソロがシェエラザードのテーマとなっている。はじめは猛々しい王の主題も、妖しく美しいシェエラザード主題の合の手が入るたびに、次第になごやかになってくる。いよいよ物語のはじまりという訳だ。(尚、この両主題は全曲を通じて随所に顔をのぞかせ、ともすれば散漫になりがちなところを、うまくまとめている。) 主部はまず弦によって海の様子が描かれる。やがてシンドバッドの船をあらわすたゆたうような主題、シンドバッドの主題があらわれて、航海のさまがえがかれる。

2. カランダール王子の物語 SIDE 2

シェエラザード主題のあとにファゴットで示される旋律が遍歴僧カランダールのテーマ。これがさまざまな楽器にうけつがれるうちに、突然トロンボーンによるファンファーレが響き、異国情緒に満ちたケンランたる部分を迎える。

3. 若き王子と王女 SIDE 3

弦ではじまる優しさに満ちた旋律は、美しく睦みあうように、ゆっくりと続く。やがて小太鼓のリズムにのって中間部がはじまるが、いつしかまた、慰撫するような愛の旋律が戻ってくる。

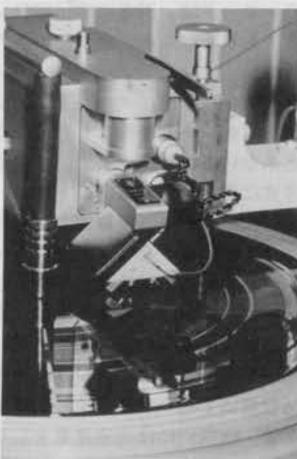
4. バグダッドの祭、海、青銅の騎士のある岩で船は難破、そして終曲 SIDE 4

シャーリアール王、シェエラザードの表情豊かなテーマに続き、フルートではじまる祭。その賑いに今までの主題が加わって、高まりを迎える。次いで海の情景。さまざま楽器にひきつがれていくうちに、難破を描くかのようなクライマックスに到る。曲が静けさをとり戻したところで、安らぎに満ちたシェエラザード主題とシャーリアール王の主題が短かく回想され、曲は終る。

解説: 真庭 健

製造: 東芝EMI株式会社
MADE IN JAPAN

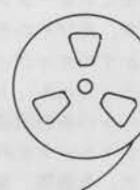




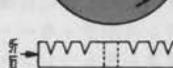
マスター・プレスについて

マスター・プレスのことについてふれる前に、まず一般的なレコードの製造工程の説明から始めましょう。

①マスター・テープ 全てのレコード(ただしダイレクトカッティング盤は除く)の音源は、この様なテープに収録されて録音スタジオから、カッティング工程におかれます。このレコードの場合は、マスター・テープの状態でイギリスのEMI本社から東芝EMI(株)に送られてきました。なお、このマスター・テープの規格は一般に、1インチ、2トラックで、テープ・スピードは38cm/sec又は76cm/secとなっています。



②ラッカーマスター ラッカーボードは、アルミの円盤に硝化綿を塗布したもので、その表面はとても柔らかです。これにマスター・テープの音がカッティング・マシンによって溝として刻み込まれます。



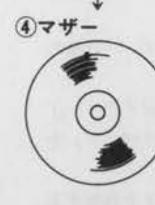
顕微鏡による溝検査(溝の溝との接触、溝の途切、溝幅や深さのチェック等)終了後、次の工程に進みます。

ラッカーボードのままでメッキができないので、銀鏡処理をして、導電性にします。

③メタル・マスター ラッカーボードにメッキ処理をして、それをはがすと凸型(メタル・マスター)ができます。このメタル・マスターで直接プレスすることを、マスター・プレスというわけです。



メッキ処理
はく離



マスターに再度メッキ処理をして、はく離すると、マザーができます。これはラッカーボードと同じ凹型ですが、ラッカーボードと違い、金属性なのでカートリッジで検聴することができるのです。

④マザー



マスターに再度メッキ処理をして、はく離すると、マザーができます。これはラッカーボードと同じ凹型ですが、ラッカーボードと違い、金属性なのでカートリッジで検聴することができるのです。

⑤スタンパー



マザーにメッキ処理をして、はく離するとスタンパーとなります。スタンパーは一枚のマスターから複数枚数の製造が可能であり、レコードのプレス枚数に応じて、スタンパーが作製されることになります。

↓
プレス機

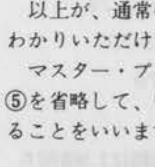
↓
テスト・プレス
(テスト盤)

↓
⑥レコード



スタンパーがプレス機にかけられ、レコードが大量に生産されます。これで、レコードが完成!

↓
12インチ
(約30cm)



以上が、通常のレコードの製作工程ですが、おわかりいただけましたでしょうか。

マスター・プレスとは、以上の工程のうち④と⑤を省略して、いきなり⑥のレコードをプレスすることをいいます。

何故、このようなことをするのかといいますと、マスター・テープから直接カッティングされた、ラッカーボードが、極めてナチュラルで素晴らしい音質をもっているため、これを損うことなく、レコードにするべく、複製の工程を少くするのです。

写真の複製で、輪郭がぼけたり、テープをダビングするとS/Nが悪化して鮮度が落ちるのと同じように、高度な技術をもってしても、レコードの工程で複製をくり返すたびに、微妙な音の差を感じるのは、止むを得ないことがあります。

そこでこのような、マスター・プレスをとりましたのですが、マスター・プレスにも欠点があります。それは極めてコストがかかり、又、大量生産がきかないということです。なにしろ、1枚のメタル・マスターでプレスできる限度は1,000枚内外とされています。今回DAMのマスター・プレスでは、安全を見込んで1枚のメタル・マスターからのプレスは500枚前後といたしました。ですから両面あわせて数10枚のラッカーボードをカッティングする必要があるわけで、おのずと製造コストも大幅にupすることになります。

今回、再びDAMがあえてこのマスター・プレスを採用したのは、カラヤン・ベルリン・フィルの新盤のマスター・テープの音が、「凄い」の一語につきたため、それを極力損わずに本盤レコードにして会員の皆様にお聴きいただきたかったからに他なりません。

45回転30cmレコードとしては、恐らく世界に稀なマスター・プレスといえるでしょうし、盤質についても東芝EMI(株)の誇る「プロ・ユース材」を使用して、名実ともに最高品質のレコードをお届けできることになりました。

皆様の装置でじっくり御試聴のうえ、御感想をお寄せいただければ幸いです。

(M.W.)



■パリ管弦楽團について

1967年、当時文化大臣だったアンドレ・マルロー(作家)の提唱によって生まれた。

前身パリ音楽院管弦楽團の伝統をうけて、その優美で明るい音色をうけつぐとともに、それまでにはみられなかった輝きをも併せもち、フランスきっとのオーケストラとなった。初代指揮者ミュンシュの亡きあとをうけカラヤン、ショルティとかわり、現在バレンボイムが音楽監督をつとめている。

このレコードで聴くヨルダノフや、デボスト(フルート)、ブルグ(オーボエ)など芸達者なソリスト達をかかえている。

■カッティングにあたって

前回のカラヤン／ベルリン・フィル「フィンランディア」で聴いたあの研ぎ澄まされた尖鋭なブラス・セクションのサウンド・パワーは勿論、直接音と間接音の対比が素晴らしいホール効果を再現した45r.p.m.ハイレベル・カッティングの感覚は今でも残っている。

そして今回はロストロボーヴィッチ／パリ管の「シェエラザード」の企画！

(これはスゴイぞ……)

あの名演奏、優秀録音の「シェエラザード」を再現するには……。

色彩感に富んだ妖艶と燃えるサウンドを再現するには……。

ダイナミックなサウンドを静寂な中にも聴けるあの繊細な……。

クラシカル・サウンドの中に色々な音の可能性を求め、かつ、オリジナル演奏に忠実なものを…。

まずカッティング・システムの選定だが、SX-74 Cuttingシステムは今までと同じラインシステムを使用、オリジナル・マスター再生のテレコには今回はスチューダーA-80/IIからノイマン(テレフンケン)MT-70Sをあえて使用した。

ロストロボーヴィッチ率いるパリ管の明るく響きのあるあのシャープなサウンドの中にキラリと輝く独特のトーン・キャラクターを忠実に、しかも色彩的な感覚を十分に再現し、より高い音楽性とEMIサウンドを理解し楽しんで頂くために……。

きっとこのレコードを聴かれた方は「これぞロストロボーヴィッチの音楽だ！パリ管の世界だ！」と、より高いリアル・サウンドを十分に堪能されることと確信しております。

Tape Recorder: Neumann MT-70S

Drive Amplifier: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-70

Cutting Head: Neumann SX-79

Diamond Cutting Stylus

*45rpm盤は33rpm盤より速度振幅は1.8倍即ち5.2dBの改善となる為それだけワイドレンジな再生が可能となる。

これはハイクオリティレコードとしてのオリジナルマスター・テープの完全な情報転写ということでは非常なメリットであり、リミッター、コンプレッサー等一切使用せずカッティングレベルも通常の+5～+7dB程度高くレコードディスク再生限界をギリギリの点までねらったものである。又、*レコードディスクの宿命ともいえる内周での、線速度低下による高域劣化、トレーシング歪(再生針の曲率半径に影響)現象があり、45rpmにすることで内周劣化を第2高調波歪に関係すると1/1.8に減少され、トレーシング性能の改善になり、より高忠実度再生の条件を可能にするものである。

東芝EMI株音響技術部 原 清介

■厚手レコードについて

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ～280μ、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等等……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されているようです。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ、超薄形レコードが話題となりましたが、その一方、レコードの厚さ(質量)がもたらす音質への影響について、再生時の問題を含んだトータル・サウンドとして研究されてきた経過が有ります。厚手レコードの持つ音質上の優秀性に着眼した当社では、今までの各種データを基に、材料開発、プレス技術をも含めたプロジェクト・チームをつくり、厳しい条件下でヒヤリング測定をはじめとした各種テストを繰り返し、遂に音質バランスがラッカーマスターに近いトーン・キャラクターをもつレコードを、ここに提供することが出来ました。レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみいただけると確信しております。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれました。

レコード材質及び製造プロセスについては、東芝EMIプロフェッショナル・レコード仕様と同様現時点最高の製造技術を導入して品質の安定化を図っております。

尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ビリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。

再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

■録音カッティング・データ

Recorded: 3,6,11,16,18, July 1974. Salle Wagram, Paris

Producer: Ronald Kinloch Anderson

Balance Engineer: Paul Vavasseur

Tape Editor: Greco Casadesus

Timings: 1st Movement 11'18"

2nd Movement 12'49"

3rd Movement 10'22"

4th Movement 12'46"

Cutting Date: 19, October, 1974

Cutting Engineer: S.Hara

S.Takeuchi

30セーチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のこと御注意下さい。

(1)オートブレーカー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)33⅓回転レコードより線速度が早いので、針先のトレース性は良くありますが、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪みなどの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。

(3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

●再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15℃～20℃位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

企画：第一家庭電器(株)DAM

製造：東芝EMI株式会社 MADE IN JAPAN